JAELE Newsletter
上越英語教育学会通信
The Joetsu Association of English Language Education
July 30, 2021 No. 24

上越教育大学に赴任して気づいたこと

上越教育大学　助教
橋本　大樹

はじめまして。橋本大樹です。現在上越教育大学の英語コースで助教をしています。私は 2020 年度に本学に赴任しました。上越は自然豊かで、とても暮らしやすい場所です。海岸沿いを運転したり、山奥の温泉を訪ねたりすると、心が晴れます。本学に赴任してから、専門分野である英語音声学についての講義をするようになりました。その中で気づいたことが三つあります。

まず一つは自分の知識の浅さを感じました。私はニュージーランドの大学院で英語音声学にかかわる研究で PhD を取得したので、自分の能力に自信がありました。ですが実際に授業をしてみると、わかってないことがたくさんあるものだなと思いました。“音ってそもそもなんだろう” と疑問に思ったり、今までなんとなく読んでいた音声波形やスペクトルグラムについてもよく考えてみるとわからないことだらけだと気づいたりしました。授業で 10 教えたかったら、100 も 1000 もわかってなかったらできませんので、改めて様々な文献にあたりました。そのおかげでいろんなことを新しく勉強できて、さらに成長できた気がします。新しいことができるようになるのは、いつでも楽しいです。

二つ目は改めて音声学の楽しさに改めて気付きました。多くの学生にとって、英語音声学という分野は大学以降で知る分野だと思います。そのため学生に音声学を教える場合、ほぼゼロの状態からやっていくことになります。ゼロからやっていくと多くの発音に関する事実が新鮮な様子で、学生が感動している姿を見る機会がたくさんあります。“アメリカとイギリスで英語の発音ってこんな違うのか” や “日本語話者にはこんな発音の癖があるのか” や “音はこんな風に空気中で実現しているのか” などなど... そうした姿を見ていると、自分が音声学に出会った時

のことを思い出します。私も学生と同じように大学で音声学に出会い、興味を持ってこの道に入りました。学生の姿を見ていると、改めてこの分野の興味深さを感じます。

最後に 20 代は青春だったなと感じます。私はついに 30 代に入りました。20 代を振り返ると、本当に充実していました。できないことができるようになるプロセスは、辛い時間が多かったけども、いつも楽しかったです。上京して一人暮らしを始めた時、ニュージーランドで母語でない英語の発音を研究し始めた時、ポルトガルで開催された国際会議で研究発表をした時。当時はとても大変だったけれど、振り返ってみるとどれも美しい時間です。つい先日には音声学で一番大きな雑誌（Journal of Phonetics）に論文を掲載できました。10 年前の私は、自分がこうして音声学の道を歩んでいるとは想像していなかったと思います。20 代は予測できないサプライズに満ちた素晴らしい時間でした。今度はまた新しい目標を見つけてがんばりたいです。30 代も新しい挑戦をして、より充実した時間にできたら嬉しいです。

冒頭でも述べましたが、上越は自然に恵まれたとても美しい場所です。この環境で、今まで住んだ場所ではできなかったことをできるように成長したいです。20 代は自分の夢のために多くの時間を費やしましたが、今度は次の世代を育成できるよう社会に貢献したいと考えています。

@新潟県十日町市清津

自分と向き合う大学院二年目

大学院２年 学校教育深化（文理深化英語）コース
湧井悠真

「小学校で英語を教えたい！」という気持ちを持ったことが、私が小学校教員を志したきっかけの一つです。学部時代に、2020 年度から全国の小学校において、外国語学習の早期化・教科化が導入されることを知り、教職に興味を持ち始めました。さらに、教育現場で当時英語を教えることが不安である教員、教えることが負担になると考える教員が多数いた状況に問題意識を持ち、今後の小学校英語教育を担うことができるような教員を目指したいと思うようになりました。そして、上越教育大学大学院に進学し、修士研究の傍ら、教育職員免許取得プログラムを受講することを決めました。

昨年はコロナウイルスの影響もあり、新しい生活様式やオンラインによる授業に慣れることに苦労しながら、将来のために必要な知識やスキルを習得し、教員としての資質を身につけることに努めました。できることに制限がありながらも、新たな経験の多い一年になりました。その中で、大学の授業や模擬授業を通して、外国語科と他の教科において指導力や教える自信に大きな差があると実感することがありました。指導力や自信は授業の質に影響を与えるため、全教科を指導する小学校教員は、教科ごとに力量が極端に異なることがあってはならないと考えます。自分は中学校・高等学校英語科教員の方が適しているのではないかと自問することも多々ありました。しかし、教科を教えること自体が重要なのではなく、児童の成長を支えたり、将来生きていくための力を育成したりすることに教職の役割や意義があると考え、教科に固執せずに小学校教員になりたいという気持ちも増しました。そこで、小学校英語専科教員になる道も視野に入れ、今年度から英語の中学校教諭免許を取得するための授業を追加で履修し始めたので、大学院二年目は自分の大きな転換となりました。

先頃、小学校英語専科教員の実態について触れることがありました。専科教員は同じ中学校区内の複数の小学校で教えており、学校間での英語教育の差が解消され、小中学校の連携や接続の一助となっていることがわかりました。しかし、専科教員は ALT と授業に向けたミーティングは行うものの、学級担任と会う機会があまりなく、児童の実態把握が不足なまま教壇に立っている現状があると聞きました。専科教員になれば、教材研究に時間を費やし、より質の高い授業づくりを目指すことができますが、学級を持たない分、子ども理解や学級経営の経験が不十分な教員になってしまう可能性があります。専科教員の利点と課題について考える機会となりました。

現在、私は全教科を教える小学校教員、小学校で英語を教える専科教員、どちらにも魅力を感じています。将来いずれの道に進むにせよ、日々の大学院での学業に励み、実践力を高めたいと強く思います。また、小学校において教科担任制が本格的に導入されれば、新たな選択肢が増えると考えています。今年度は、自分自身と向き合いながら進路を考え、目指したい教師像を膨らませていく一年にしたいと思います。

学生に戻った今、思うこと

大学院１年　学校教育深化（文理深化英語）コース
岡本　敏夫

大学院に入学し、３か月が経ちました。学校現場での生活とリズムが一変し、自分の勉強や研究に没頭できることにありがたさを感じます。同級生や先輩、先生方にも恵まれ、大学院進学は良いことづくめです。私生活では、夕方には自宅に私がいることに２人の子どもは目を丸くして驚いています。ゆっくり学校の話を聞いたり、宿題を見たりして家族の時間が増えたこともうれしいです。あまりに穏やかに過ごしすぎて、体型が変わるほど増量し、町で再会した保護者の皆さんも目を丸くしています。現場では激しく動いていたのだなあと思う日々です。

私は、上越教育大学を卒業し、上越地区の小学校で１２年間務めました。振り返ると、スキー、登山を始め、初挑戦の連続でした。最近になってようやく初めてのことに出会うことが減ってきたかな、と思った時には「中堅」という立場になっていました。毎年新人のつもりで過ごしてきた自分がリーダーになれることは何だろうと考え、「外国語活動主任」だけはずっと続けて務めてきたことに気づきました。ただ、胸を張って「小学校英語の先駆者です！」と言える訳でもなく…。ただ、授業後に「楽しかった！」と子どもと一緒に言えることを第一に考え授業をしてきました。とにかく目の前の子ども達のためだけを考え、がむしゃらに実践を重ねてきたと思います。

大学院での生活と教育現場での生活を比べると、時間の流れ方が大きく違うことを感じます。これまで、自分が「良い！」自分で「好きだ！」と思った実践をしてきました。子ども達の楽しんでいる表情をたくさん見られるようになり、自分らしい外国語活動の授業の型ができてきたところです。しかし、その日その日を必死に過ごしてきた私には、自分の実践をじっくり振り返る時間はありませんでした。今なら、自分の経験や実践を俯瞰して見ることができます。手ごたえのあった実践と理論とを照らし合わせて、意味づけをしていきたいと思っています。「こうすると良いんだよ、たぶん…。」から、胸を張って「方法はいくらでもあるから何でも聞いて！」と言えるように研究をしていきたいと思い、ワクワクしています。たった２年間ですが、残りの教員人生の武器を身に付けていきたいと思います。

学生になり、本当に久々に辞書を片手にじっくり勉強しています。学部生の頃（あんなに不真面目だったのに）と比べると理解するのに時間がかかったり、思い込みからなかなか抜け出せなかったりすることもありますが、学ぶことはいくつになっても楽しいものだと思います。新潟県の派遣職員として、私自身が学ぶ楽しさをたっぷり味わって、現場で子ども達に学ぶ楽しさを還元できるよう、励みたいと思います。

予想外の大学院生活のはじまり

大学院１年　学校教育深化（文理深化英語）コース
神戸　智江

この１月に上越に越してきて、早くも半年がたちました。ウィンタースポーツを楽しむために早めにやってきたはずが、上越市 36 年ぶりの大雪に見舞われ、雪かきにいそしむこととなりました。アパートを決める時、不動産屋さんにこの辺りは降っても 1m くらいと聞いていたのですが、完全に裏切られてしまったわけです。3 時間に 1 回雪かきをしても、毎回腰まで雪があるなんて今後もう一生経験することはないでしょう。ないといいなと思います。縁もゆかりもない土地で、今まで経験したこともないような予想外の大雪に驚いていると、すぐに桜の季節になり、あっという間に入学式を迎えました。新しい場所に足を踏み入れる時のあの独特の緊張感を心に抱きながら、英語コースの先輩方や同級生と出会いました。コロナウイルスの影響もあり、不安なことも多かったのですが、親切で面白い先輩方や個性豊かな同級生のおかげで、無事大学院生活をスタートすることができました。私は昔から自分の所属するところが一番だ、と思うことが多いのですが、6 月の今、ここでもそう思えていることは幸せだなと思っております。

私は学部時代、政治学が専攻で、働いた会社も商社でしたので、教育学に触れるのは、この 4 月が初めてでした。まず驚いたことは、授業の多さでした。小中高の免許をはじめから取ろうとしていることもあるのでしょうが、1 限も 6 限もある日がほとんどで、私の大学院に抱いていたイメージは一瞬で覆されてしまいました。コロナ禍ということもあり、オンライン授業が多いのかなと思っていましたが、ほとんどの授業が対面で行われ、これもまたイメージと大きく異なっていました。こんなわけで、4 月は授業に出るだけでいっぱいいっぱいの状態で、授業の内容が頭に入ってくるようになったのは 5 月頃になってからでした。

そうして思ったのは、自分の好きなことを学ぶということはこんなに面白いものなのかということでした。初めは、学部の頃に比べると倍以上出席し課題をこなさなければならないなんて大変で嫌になってしまうかな、と思っていましたが、またこれもイメージを覆されました。

大学院の授業では、英語の発音を録音して音声分析をしたり、生徒に言語を教えるためにはその内容を知らなければならないということで言語とは何かについて考えたり、日常の会話を録音して会話分析の方法を学んだりと新しいことばかり学びます。小学校の免許のための授業では、実際に小学生のやるような手遊びをしてみたり、リコーダーを吹いてみたり、自分が小学生だったころを思い出して懐かしい気持ちになりつつも、それを教える立場から学ぶということで新しい気づきばかりです。

予想外のことばかりですが、中学生から英語が好きだった私にとって、英語をこんなにたくさんの側面から見ることで学びを深めることができるのは、とても貴重な経験だと常々感じています。これから 3 年間という短い期間ですが、その時間を最大限に活かして、充実した時間にしていきたいと思います。

英語教育雑感

妙高市立妙高高原中学校長
重野　準司（平成９年度修了生）

連載第２回

指導主事時代を振り返って

私は、今年で教職生活 35 年目を迎えました。来年の春に定年退職する予定です。この間、大学院で学ばせていただいた２年間、そして、市教委の指導主事として３年間、県の指導主事として４年間、現場を離れて仕事をしました。今回は、指導主事時代を振り返って、書かせていただきます。

上越市教育委員会の指導主事として

平成 19 年４月から 22 年３月までの３年間、私は指導主事として、上越市教育委員会にお世話になりました。この３年間、さまざまなことに関わらせていただきましたが、印象に残っていることを一つ書かせていただきます。

当時、上越市教育委員会には 19 名のＡＬＴが所属していました。英語担当ということで、必然的にＡＬＴ配置や研修、生活支援など、ＡＬＴに関わるすべてのことを担当しました。その中で今でも忘れられない１人のＡＬＴについて、若干紹介させていただきます。

彼はＪＥＴで上越市に来ましたが、ＪＥＴが終わってもＡＬＴとして上越市に勤務してくれた指導力も高い頼りになるベテランＡＬＴでした。ところがある出来事をきっかけに、それまで良かった関係が、がらりと変わってしまいました。

当時、ＡＬＴは市教委雇用ということで、市内の学校に勤務する他の教職員と同じように、個人用のアドレスを付与されていました。ですが、ＡＬＴはヤフーメールやGメールのようなフリーメールのアドレスを取得していて、ＡＬＴ同士や海外とのやり取りでは、ほとんどがこのフリーメールを活用するというのが実態でした。

ところがある時から、市教委の方針として、勤務する学校で使用しているコンピュータからのフリーメールの送受信は行わないことが決まりました。学校コンピュータからのフリーメールでのやり取りは、セキュリティ上、望ましくないということが理由でした。私は、ＡＬＴ担当として、この件を１９名全員に周知し、徹底させるべく、働き掛けましたが、どうしても納得がいかないということで、この方針に反旗をひるがえすＡＬＴが一人いました。理由は、フリーメールの方が、市教委が運営するメールよりもずっとセキュリティはしっかりしている。だから、その説明は納得いかないというものでした。そのあたりに疎い私は、それが正しいのかどうか、自身では判断しかねましたが、市教委の情報担当からは、セキュリティ上、フリーメールは危険だという見解に変更はないと言われました。

実際、市教委のメールシステムは、日本人が日本語でやり取りすることを念頭に作られたシステムなので、正直、英語の文を作成するときには、少なからず不便を感じました。そういう意味でも、フリーメールの使用禁止措置は、ＡＬＴにしてみれば、不便きわまりないということが言えました。

私は市教育委員会の指導主事として、この方針を周知・徹底させる立場でしたので、そのＡＬＴの主張はある程度理解できたものの、立場上、受け入れることはできませんでした。何とか本人を説得しようと、電話で延々と話し合いましたが、お互いに一歩も引かず、どうしても相容れることができませんでした。

それ以来、関係がぎくしゃくしてしいましたが、彼はＡＬＴとしての仕事はきっちりやってくれていました。そうこうしているうちに年が変わり、再契約の時期がやってきました。予想通り彼は、再契約を望まず、その年の夏には上越を去っていきました。残念な思い出です。

上越教育事務所の指導主事として①

平成 25 年４月から平成 29 年３月までの４年間、私は指導主事として、上越教育事務所にお世話になりました。この間、様々なことに関わらせていただきましたが、やりがいを感じたことが大きく３つあります。

一つ目は、自身の英語教師としての考え方を大きく変えてくれた胡子美由紀先生（広島県の公立中学校教諭）に出会ったことです。

英語担当の指導主事として、時代に要請に即した指導とは何かに係る情報に通じていることが求められますが、そのためには、常にアンテナを高く掲げて、情報収集することが必要だと考えています。そのための手立てとして大事にしてきた取組の１つが、研修会への参加です。平成 28 年の春、私はＥＬＥＣの春期英語教育研修会に参加しました。ＥＬＥＣの英語教育研修会は春、夏、冬にそれぞれ行われていて、私はリピーターとして、何度となく参加させていただいておりました。その時は、胡子先生の講座を受講したくて東京へ行きました。胡子先生はその当時から開隆堂のサンシャイン（上越地域で採択されている教科書）の執筆者として、あるいは、先進的な英語教育の実践者として、活躍されておられました。ＥＬＥＣの英語教育研修会は、午前の１講座と午後の１講座をセットで受講することになっており、この日、胡子先生の講座は午前中でした。

胡子先生の研修会を受講された経験がおありの方でしたらお分かりいただけると思いますが、細くて華奢な身体からは予測できない、とても力強く、テンポの早い、見ていて、また、参加していて、心地よい指導をされました。そして、実践内容とても分かりやすく、いちいち腑に落ちるものでした。私はそれまでも、いわゆるカリスマ先生と呼ばれるような中嶋洋一先生や田尻吾郎先生の研修会には何度も参加してきて、書籍等もいろいろ手にして読みあさり、彼らの実践に学ぼうと努めてきましたが、胡子先生の指導に触れた時の印象は、それまでとは明らかに異なる受け止めを感じていました。

英語教育に携わる者であれば誰でも、自分が担当している生徒に即興的に英語で表現できる力を身に付けさせたいと思うのではないでしょうか。同時に、それは決して簡単なことではないということも私たちは自身の経験を通じて理解しています。しかし、中嶋先生や田尻先生は、ご自身が担当する生徒に即興的な英語の表現力を身に付けさせていて、そういう意味では、自分には

できなかったことを実現させた方たちですので、そうした方々の実践に学び、自身も英語教師としての夢に近づきたいと考えていました。しかし、お二人の先生方の実践は、正直凄すぎて、いくら素晴らしい実践だと実感しても、自分にできるのかと自問すると、残念ながら答えはＮＯでした。たとえ真似た取組をしたとしても、上辺だけの模倣では、どうにもならない印象でした。しかし、胡子先生の実践は違いました。直感として、これなら自分にもできるのではないか、直感的にそうだと思ったのです。私にとっては、青天の霹靂でした。胡子先生の講座を受講したことで、ものすごく英語教師として動機づけられ、自分にも生徒に即興的な英語力を身に付けさせる指導ができるのではないかと、初めての感覚にとても興奮していました。

まだこの話には続きがあります。午後の講座（誰の講座か思い出せませんが･･･）がまさに始まろうとした時です。たまたま空席だった私の隣の席に胡子先生が座られて、一緒に午後の講座を受けました。講座中に行われるペアワーク等は一緒にやらせていただいたので、隣席のなじみで、英語教育に係るお話しをいろいろとさせていただきました。

私は当時、ＥＣＨＯ会という上越地域を中心とする英語教師の研修団体の会長をさせていただいていたこともあって、胡子先生の研修を上越の先生方に何とか受けさせたいという一心で、先生と名刺交換しながら、上越に研修会の講師として来ていただけないかとお願いをしました。先生は、「呼んでいただければ、喜んで行きます」と快諾してくださり、その年の 12 月に、先生を上越にお迎えしました。それ以来、先生の大ファンになりました。余談ですが、その２年後にも先生に再び上越に来ていただき、多くの先生方の英語教師魂に火を付けていただきました。ちなみに 2021 年、この夏のＥＬＥＣ英語教育研修会に胡子先生の講座が開設されるようです。東京には行けませんが、Online で行われるということでしたので、久しぶりに胡子節をお聞きしたいと思っているところです。

上越教育事務所の指導主事として②

２つ目は、英語担当の指導主事として、毎年、県の教員採用試験に関わったことです。

この仕事は、問題作成に始まり、試験当日の監督、その後の採点作業と、一連の業務に携わりました。まずは、問題作成です。採用試験は 7 月に行われますが、問題作成は 4 月にスタートします。この取組はいつも総合問題の元になる教育書の原書選びから始まります。ネットでいろいろあたりながら、最終的にこれはと思うものを購入し、それを只管読み、原書のどの部分を抜き出すのかを決めて、問題作成会議当日に、抜き出す部分のコピーをとって、会議に出ました。作成担当者それぞれが選んだ原書のコピーをもって集まり、比較検討の末に、適切だと思われるもの、候補をいくつか選びます。最終的には、義務教育課の指導主事が決済を経て、決定します。ある年、私が選んだ原書が適当だと担当者間で認められたのですが、最終的にそれが義務教育課の決済で引っかかり、却下されたという話しを聞きました。理由は、当該原書の記述内容の一部に教育委員会を揶揄するような記述が認められたからだそうです。いろいろな視点から検討していたんだと知りましたが、私は自分の選んだものが弾かれて、残念でした。

また、総合問題が何問、英作文の問題が何問、聞き取り問題が何問、というように出題される問題形式が予め決まっていて、それを作成担当者で分担して問題を作成します。何回かに渡る問題作成会議を経て、原案が完成します。

私は当時この問題作成の仕事が大好きでした。それは自分の専門性を発揮でき、仕事が形とな

るので、大きなやりがいを感じていたからです。今でも強く印象に残っていることですが、英語力にはある程度自身があったのですが、高校の先生方の英語力には脱帽でした。負けたくないと密かに対抗心を燃やしていましたが、日頃から難易度の高い英文に触れている高校の先生方との英語力の差は歴然としており、認めざるを得ませんでした。

また、採用試験はスクリーニングテストなので、ある程度難易度の高い問題を作成することは当然だと思いましたが、実際のできあがった試験問題の難易度は非常に高いと感じました。決して奇問ではありませんでしたが、いわゆる難関有名大学の入試問題と何らひけをとらない難問であったと記憶しています。

問題作成が終わると次は、採用試験当日の試験監督です。英語はいつも新潟高校を会場に行われていました。試験監督をしながら、受検者の問題のでき具合が気になり、机間巡視をしながら、特定の問題の出来具合をチェックしていました。その時感じたのは、難問であっても、できる人はできるということです。やはり、専門性は高いに越したことはありません。これから教員を目指す人はもちろん、既に教員になっている人も、やはり、専門性を高める取組の継続は不可欠です。

採用試験が終わると、すぐに採点作業が始まります。担当者がほぼ缶詰状態で採点業務に当たり、概ね２日程度で終えます。１次試験の合否は単純に点数で決まります。逆に点数さえ取れば、1 次試験は通過できます。これから採用試験を受けるみなさんには、専門性の向上のための取組をしっかりやってほしいと思います。

採用試験に関わって、今年度の新潟県の実施要項によれば、１次試験でオーラルプレゼンテーション（テーマに対して自分の考えを英語で話す）が行われ、そこで即興的なスピーキングスキルが試される予定です。ネイティブと日本人の試験管の２名で評価します。私が３５年前に採用試験を受けたときは、１次試験で英語による面接試験がありました。大学４年在学中に受検したときには、全く歯が立たず、結果はあえなく不合格でした。これではダメだと考え、その後、すぐにスピーキング力を高める取組を始めました。英会話のスクールに通い、只管、スピーキング力を磨きました。結果として、１年後の採用試験では首尾良く試験をパスし、今があります。今でも毎週、英会話スクールに通っていますが、ＡＬＴと対等に英語の指導の在り方について議論する力は持ち合わせていると自負しています。

上越教育事務所の指導主事として③

３つ目は、指導主事として、県中教研の指定研究の指導者となり、その流れでＡ先生と出会ったことです。

平成 27 年度から 28 年度の２年間、Ｂ市中教研が県中教研の研究指定を受けました。私は、指導者として支援してほしいという要請を受けて、２年間、直接的に関わらせていただきました。

当時、研究推進責任者として本研究を引っ張ったのは、Ｃ中学校のＡ先生でした。彼は、非常に向上心が旺盛な人で、研究推進責任者としてまさに適任でした。研究指定２年目の６月上旬、２年目の取組をスタートさせるべく、私は打合せをするために彼のもとへ向かいました。「上越教育事務所の指導主事として①」でも触れましたが、その年の３月にＥＬＥＣの研修会で胡子先生の講座で大きく触発されて以来、私は胡子先生の指導方法を、当該指定研究に生かすことができないか、ずっと考えていました。そして、ジャパンライムで購入した胡子先生の実践を紹介する

ＤＶＤを持っていって、彼に見てもらいました。予想通り彼は直ぐに食いついてきました。指定研究での活用もさることながら、彼自身の授業改善、特に、生徒たちにどうやって即興的な表現力を付けさせるかに係る取組を始めてくれました。

Ａ先生の教育者としての素晴らしい所は、やろうと思ったら、直ぐに実行するところと、一旦始めたら困難にぶつかっても途中で投げ出さず、試行錯誤しながら、粘り強く取組を続けるところです。

そして、９月後半にＡ先生が公開したプレ授業（スモールトークからチャット、そして、モノログへと流れる帯活動）を参観して、私は衝撃を受けました。始めて胡子先生の取組を紹介した６月上旬からの短期間の実践で、生徒は大きく変貌を遂げたと聞きました。彼はその年に現任校に赴任したばかりで３年生を担任し、なかなか思うような指導ができずに悩んでいました。何とかしなければと思っていた矢先に私が胡子先生のＤＶＤを紹介したことで、渡りに船のような受け止めをしてもらえたようです。生徒の実態としては、英語に苦手意識をもつ生徒が多く、最初は反応が薄く、厳しい現実に直面していたとのことです。しかし、彼はまさに一念発起して、新たな取組を始めました。生徒にとっては初めてだったこともあり、当初は全く受け入れられなかった指導も、根気よく何のための取組なのかを丁寧に説明しながら、粘り強く指導し、結果として生徒の英語の授業に対する認識を変えました。生徒同士で、笑顔で英語のやり取りを楽しむ姿は、まさに衝撃で、彼の指導力の高さを実感しました。

最後に、Ａ先生からいただいたご自身の担任クラスの生徒が書いた最後の英語授業での振り返りコメントと、それに対する彼のリアクションを紹介して終わりにします。ちなみに、彼が生徒のコメントを見て、嬉しくてどうしても私にも見て欲しかったということで、送っていただいたものです。

【１年間の英語の授業を振り返っての生徒のコメントの一部】※原文のまま抜粋しました。

・１，２年生の頃は、英語を全くやらなかったけど、３年生になって英語が楽しくなって良かったです。
・１，２年生の頃は、英語はほとんど分からなかったし、嫌いだったけど、３年になって授業がすごく楽しかったから好きになれたし、５教科の中で一番得意な教科になりました。
・英語の授業のおかげでクラスの雰囲気もよくなった気がします。
・一年間で一番楽しかった活動はモノログです。最初はうまく表現できなくて、なかなか語数が伸びず、内容も薄いものだったけど、回数を重ねるにつれてだんだんと表現できるようになり、内容も深まったと思います。モノログは一年間で最も力がついた活動でもありました。３年生になってからの英語の授業は、１，２年生の時より自分が英語を使っていることを実感できました。３年間で培った英語力を高校でも生かしたいです。
・一番力がついたのはチャットやモノログです。上手く文をつなげて書くことができました。一年間苦しいこともあったけど、自分の英語力が上がっていって、英語がだんだん好きになってきたので、将来もっとできるように頑張りたいです。
・一年間本当に楽しくて、幸せでした。このメンバーじゃなかったら、こんなに楽しめなかったと思います。盛り上げてくれたみんなに感謝したいです。もっと時間があれば、きっと今よりみんなの英語の力がつくと思います。１日１日しっかりと取り組み、将来につなげたいです。

以上です。念のために申し上げておきますが、肯定的なコメントだけを抜粋したのではなく、ほとんどのコメントが肯定的なものでした。このコメントを読んだA先生の反応はこうです。

【生徒のコメントを読んだＡ先生のリアクションの全文】※情報保護のため一部変更しました。

年 140 回予定されている英語の授業が昨日終了しました。４月の頃の「言葉を発したら何かを言われるのでは？」という張り詰めた空気がなくなり、親和的な雰囲気で毎日の授業を行うことができました。たくさんの人と関わり、英語で遊ぶことで心を開き、関係を温め、人前で発表したり、自分で考えて英語を使うトレーニングを重ねたりすることで、〇組のみんなが素晴らしい集団になりました。英語の授業を通してこんなに変化を感じることができたのは初めてです。

10 分ほどしか書く時間をとれませんでしたが、振り返りを見て、みんなにとって英語の授業が大切なものになっていったということが伝わりました。自分の成長やクラスのつながりを書いている生徒が多く、ぜひみんなに読んでもらいたいと思いました。英語の授業が〇組のみんなの大切な思い出の一つになり、担任としてこの上ない幸せを感じています。本当にみんなと授業ができて楽しかったです！欠席した人はごめんなさい。

以上です。ありがとうございました。

編集後記

2021 年度も新型コロナウイルスの蔓延は続き、教育現場でも学生の皆さんが制約の多い学生生活を強いられる状況が続いています。現在の大学 1，2 年生は大学入学後の最もリラックスした楽しい時間を経験せずに大学生活を送っていることを考えると本当に気の毒でなりません。しかし、マイナス面だけを嘆いても仕方がありません。どういう逆境にあっても必ずプラスに転化できることがあると思いますが、IT が苦手の私でも Zoom や学習管理システム(LMS)をそこそこ使えるようになったのはコロナ禍での必要性のおかげです。先日、大学 1 年生を対象とした課題解決型学習(Project-based Learning)の授業において学生のプレゼンを見る機会がありました。ずっとオンライン授業で会っていた学生諸君が最終回のみ大学に集合してプレゼンをしたのですが、かつてないスライドのクオリティーでした。現在の大学生の IT スキルはコロナ禍のせいでかなりアップしているのではないかと感じます。

（編集委員 H.I.）

2021 年 7 月 30 日発行

発行者 上越英語教育学会

ニューズレター編集委員会

北條礼子（上越教育大学）

野地美幸（上越教育大学）

飯島博之（埼玉県立大学）